【224】

氏　名（本籍）	加納昌彦（静岡県）
学位の種類	博　士（農　学）
学位記番号	博甲第 5375 号
学位授与年月日	平成 22 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	生命環境科学研究科
学位論文題目	**茶の生産・流通における主体間の関係性に関する研究** －静岡県における事例を中心に－

主　査	筑波大学教授	博士（農学）	納口るり子
副　査	筑波大学教授	農学博士	茂野隆一
副　査	筑波大学准教授	農学博士	林　久喜
副　査	筑波大学准教授	博士（農学）	松下秀介
副　査	筑波大学名誉教授	農学博士	永木正和

論文の内容の要旨

本論文の目的は、静岡県を主な対象として、生産者の減少、法人化の進展、産地間競争の激化、茶葉（リーフ茶）の消費から茶飲料（ドリンク茶）消費への移行、流通主体の業務拡張などの要因により、大きく変化している茶の生産・流通全体の構造を分析し、有効な販売戦略遂行のために、生産・流通主体がどのような主体間の関係性を持っているかを明らかにすることである。対象としては、特に中小の生産者と産地茶商、消費地茶店に注目して分析を行った。

まずは、わが国における茶業の現状と問題点を整理した上で、茶生産および茶流通の構造、茶生産組織および茶流通組織、茶業の将来への展望について述べた。続いて、静岡県内の 2 産地を事例として取り上げ、2 産地における生産と販売における産地ブランド化の実態を、地域内の生産者、農協、産地茶商、行政機関などの関係者間の組織化の実態と合わせて解明した。いずれの産地の戦略においても、生産者から消費者にいたる関係者が産地組織を構成し、双方向の情報流通が実現されていた。この分析により、関係者の組織化や消費者・実需者ニーズを生産側にフィードバックすることの重要性を確認した。

続いて、茶の流通経路に関する分析を行い、静岡県における生産者から流通業者（産地茶商）への流通経路が多様であり、ほぼ 4 経路に分類されることを明らかにした。この多様性は、県内各産地の自然環境や生産条件の多様性に対応して存在意義を持ってきたことが明らかになった。また鹿児島との比較から、静岡の特長は、「流通構造が複雑でかつ多品目少量の取引」にうまく対処できる仕組みができており、これは産地間共通において優位性を持つことが示された。

次に、産地から消費に至る経路を三段階に分けて、それぞれの段階における関係者の組織化の状況と、意義について明らかにした。はじめに、製品差別化のための「農－商」の取り組みを中心に、静岡県茶産地における生産者と産地茶商の連携について述べた。ここでは認定農業者とビジネス経営体と呼ばれる法人を取り上げ、比較検討した。二者のうち、認定農業者は基盤が脆弱で茶ビジネス経営体に比べ経営環境は厳しいが、組織化された認定農業者集団には品種茶、栽培条件を組み合わせた多種多様な茶作りができるという優位性がある。今後この集団が経営を維持していくためには、さらに産地茶商との「農－商」連携の構築が必

要であると示唆された。

第二段階として、茶流通業者の「商－商」連携の事例を中心に、産地・消費地における茶流通業の組織化について分析した。近年、大型商業施設の増加に伴い、消費者の専門店離れが生じている。茶業においても、消費地および産地では流通構造に変化が起き、経営規模の大きな消費地茶店や産地茶商の中には、従来の経営形態から新たなものへと、業態を変えようとする動きが顕在化している。一方、生産者から消費者への流通過程において、産地側、消費地側でそれぞれ１社ずつの流通業者が関与する従来型（産地茶商＋消費地茶店）の連携では、消費地茶店からの要望を産地茶商が対応するなどリテールサポートの実現により機能し、顧客との信頼関係は構築されることが明らかになった。

最後に、茶流通における「農－商－商」連携と、産地茶商の果たす役割について明らかにした。本章では生産者、産地茶商、消費地茶店の機能と役割について明確にし、産地茶商の役割が正常に機能、実行された時に初めて「農－商－商」連携が成立することを、３者が連携して進めた品評会出品茶に代わる製品の開発を事例にあげて検証した。

以上の分析結果により、次の結論を導き出すことができた。

第１に、茶の生産･流通構造は青果物等とは異なり、複雑で多岐にわたっており産地による違いも大きい。これは茶が収穫（摘採）されたそのままの状態で消費されるのではなく、一次加工（茶生葉を荒茶にする）、二次加工（荒茶を仕上茶にする）という工程を経由した後、市場に流通することに起因している。またそのことにより、流通には様々な組織や主体が存在し、関与しあっている。

第２に、山間地産地における茶業は茶園が傾斜地に点在し、機械化の遅れや生産時期の問題などの不利性を持つが、産地ブランド化戦略により、これを克服できる可能性がある。このためには生産者（川上）から消費者（川下）にいたる関係者が産地組織を形成する必要がある。

第３に、茶の流通経路の短縮化、単純化により流通コスト削減を目指す動きが主流となっている。しかし一方で多種多様な特徴を有する生産や流通も支持されている。これは、個性豊かな茶を求める消費者からの評価が高いからであり、消費者ニーズに合った商品の提供を行っていくことができれば、静岡県における４つの流通経路はそれぞれに合理性をもって必然的に存続していくことができる。

第４に、茶の生産・流通は効率に優れた一部の大規模組織や主体が中心になって担う傾向が強まっているが、小規模組織が（「農－商」、「商－商」、「農－商－商」）連携する仕組みも重要である。なぜなら小回りが利くこれらの組織は、性別・年齢・地域などにより異なる消費者の嗜好に柔軟に対応できるからである。昨今他の農産物では、消費者や消費者の代弁者である消費地専門店から寄せられる要望を今後のものづくりに反映させるための仕組みが出来上がりつつある。茶においても特に、小規模な生産者と産地茶商、小規模な産地茶商と消費地茶店、小規模な生産者と産地茶商および消費地茶店の連携が成り立つことにより、相互のコミュニケーションが図られ消費者ニーズに合う茶が供給されることが示された。

審 査 の 結 果 の 要 旨

農産物の生産・流通ではこれまで、主体の規模拡大と流通の合理化という動向が主流であった。消費者や小売店への直売がもてはやされてきたとも言える。しかし、製品の多様性や品質の違いを差別化要因にしうる緑茶のような農産物では､旧来の流通業者の役割が現在においても重要であることを明らかにしたことは、本論文の大きな貢献である。本論文において加納昌彦氏は、静岡県茶業の生産から流通までの全体を分析対象とすることにより、消費者ニーズに応え産地の強みを生かすような生産・流通のあり方を、その担い手に焦点を当てて明らかにした。分析により、生産及び流通の主体間の連携が重要であり、それによる生産側から消費側への情報流通､逆に消費側から生産側への情報流通の双方が実現されたときに､消費者ニーズに合っ

た商品やサービスが提供されるということが明らかになった。このように本研究成果は、今後の産地戦略において遂行すべき、重要なインプリケーションを含んでいる。

若干残された課題もある。消費者ニーズの多様性を重要な概念としているが、消費者ニーズ自体は本論文で分析されているわけではない。また、中小の生産・流通の担い手が、連携して強みを発揮する余地がどれだけあるのかといった、いわば意義の限界についての考察が十分とは言い難い。しかし、これらは本論文の次のステップの課題である。本論文は十分に高い研究成果を得ていると認められる。

よって、著者は博士（農学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。